

東京要塞

海野十三

青空文庫

非常警戒

凍りつくような空^{から}つ風が、鋪道^{ほどう}の上をひゅーんというような唸^{うな}り声をあげて滑^{すべ}ってゆく。もう夜はいたく更^ふけていた。遠くに中華そばやの流してゆく笛の音が聞える。

丁度^{ちやうど}そのころ、築地本願寺裏^{つぎし}から明石町^{あかしちやう}にかけて、嚴重な非常警戒網^{あかしちやう}が布^しかれた。

しかし制服の警官はたった二人だけ、あとはみな私服の刑事ばかりが十四、五人。寝^ねざず鎮^まった家の軒端^{のきば}や、締め忘れた露次^{ろじ}に身をひそめて、掘割^{ほりわり}ぞいの鋪道^{ほどう}に注意力をあつめていた。

一体なにごとが始まるのだろうか。

「おい、来たぞ」

「来たか。通行人はどうだろう」

「あつ、向うの屋上から青灯^{あおとう}をたてに振っている。幸^{さいわ}い通行人は一人もないというのだ」

「うむ、うまくいったな」

警官たちの顔つきは、緊張そのものであった。

誰がやって来たというのだろうか。

本願寺裏の掘割ぞいの舗道の方へ、ふらふらと千鳥足の酔漢すいかんがとびこんで来た。

「うーい、いい気持だ。な、なにもいうことはねえや。天下泰平とおいでなすつたね」

取りとめもない独ひとりごと白ひのあとは、鼻にかかる何やら音頭の歌い放し。

すると、その後からまた一人の男が、同じこの横丁にとびこんできた。

前の千鳥足の酔漢は、小ざつぱりしたもじり外がいとう套はを羽織はつた粹いきな風体ふうていだが、後から

出てきたのは、よれよれの半纏はんてんをひっかけた見みすぼら寔らしい身なりをしている。

大道だいどうも狭いと云わんばかりに蹣跚よろめいてゆく酔漢の背後に、半纏着の男はつつと迫って

いった。

「あつ、な、なにをやる——」

と酔漢が愕おどろきの声をあげるところを、半纏着の男は酔漢の襟えりがみつかんで、ずでんどう

と舗道になげとばした。

「うぬ、——」

と起きあがろうとするのを、半纏男は背後から馬乗りになって、何やら棒のようなもの

でぼかぼかと滅多うち。

ぐたりと伸びるところを、半纏男は足をもつてずると堀ばたに引張つてゆき、足蹴にしてどーんと堀の中になげこんだ。

どぼーんと大きな水音が、闇を破つて響きわたった。

ずいぶん乱暴な行為であった。

しかし警官隊は、林のように鎮まりかえっている。彼等にはこの暴行者がまるで映らないようであった。

なんとこの腑に落ちないこの場の光景であろうか。

暴行者の半纏着の男は、堀ばたに立つて、じつと水面を見つめていた。五秒、十秒、二十秒……。

すると、彼は何思ったか、手にしていたアルミの弁当箱をがたと音をさせて地上に投げだすが早いか、そのまま身を躍らせてどぼーんと堀のなかに飛びこんだ。

「おーい、しつかりしろ」

彼は片手に半死半生の酔漢を抱えあげた。そしてすっかり救命者になって、酔漢を助けながら、のそのそと堀から上つてきた。二人とも泥まみれの濡れ鼠であった。

「おーい、しつかりしろ。どうしたんだ。傷は浅いぞ。いまどこかの病院へつれてつてやるからな」

と、しきりに介抱かいほうをするのであった。

堀の中に抛りほうこんだり、それからまた自分も濡れ鼠になつて堀のなかに飛びこんだり、実に御丁寧千万なことだった。

奇怪なのは警官隊の態度だった。映画撮影を見物しているわけでもあるまいし、この暴行を眼の前に見ながら、知らん顔をしているのであった。

折から一台の空円タクあきえんが、スピードをゆるめてこの横丁に入ってきた。

「おい、運転手さん、ちよつと手を貸してくれないか」

半纏着の男は手をあげて叫んだ。

「おう、どうしたどうした」

「いや、酔払よっぱらいが、この堀の中に落つこつて、もうすこしで土左衛門どざえもんになるところだったよ。だいぶ傷をしているらしいから、その辺の病院まで搬はこんでくれないか」

「うん、よしきた」

円タクは、濡れ鼠の二人を吸いこむと、そのまま明石町の方へ走り去った。

すると、軒端に隠れていた警官隊がそろそろと出て来た。

「やあ、どうも御苦労さま。署へかえつて、熱いものでも一杯喰べようじゃないか」

「じつとしていたんで、風を引いてしまったよ。はつくしよい」

警官隊は、そろそろと引上げていった。どこまでも奇妙な築地夜話^{やわ}であつた。

秘密工事

「わしんとこの吉が御厄介^{ごやつかい}になつとりますそうで、——」

と、シン普森病院の受付に、真青^{まっさお}になつてとびこんで来た五十がらみの請負師^{うけおいし}ら

しい男があつた。

「誰方^{どなた}でございますか」

と、肉づきのいい看護婦が、憎いほど落ちつき払つて聞いた。

「えっ」と五十男は気をのまれた形であつたが、「わしは土木工事の請負をやっている熊^く

谷五郎造まがいごろうぞうです。うちの若い者の吉——という和本名は原口吉治はらぐちきちじてえんですが、どこかで怪我をして、誰方やらに助けてもらって、こっちに御厄介になつてしていると聞きましたか……」

すると看護婦は、軽くうなずいて、

「どうぞお上り下さいまし」

といった。

原口吉治は、ベッドの上にうんうん唸うなつていた。

親方の声を聞くと、さすがにちよつと唸り声をやめたが、しばらくすると、またたまたまなくなつて前よりひどく唸り出した。

「どうしたんだ、吉。だからあれくらい云つといたじゃねえか。酒を呑みあるいちやいけない。もし呑むんだつたら、わしの家で呑め、それなら間違ひもなくて済すむからと、あれほど云つて置いたのに、これじゃしようがないじゃないか」

と見舞いに来たのか、叱しかりに来たのか分らない親方五郎造だった。

「親方、当人は相当ひどい怪我をしているんですよ。それに私が通りかからなきや、命を落とすところだったんです。あまりガミガミ云つちや可哀かわいそうですよ」

と、隅に腰を下ろしていた髭蓬々の男がいった。彼は病院で借りたのらしい白いネルの病衣びょういを二枚重ねて着ていた。

「おお、お前さんでしたね、わしのところへ知らせて下すつたのは。そして吉も助けてもらつて、どうも今度は、たいへん御厄介ごやくかいになつて済みませんです」

「いや、なんでもありやしません」

「いずれ後から、御礼はいたします」

「その御心配には及びませんよ」

そういつたこの男の言葉は、偽りがなかつた。自分で抛なげこんで置いて、自分で助けたんだから、礼をされる筋すじ合あはない筈はずだつた。

五郎造は、病人の枕許でひどく弱つたらしい顔をしていた。それは病人の容態ようたいに対する心配だけではないように思われた。

「……ちよつ、仕様しょうがねえやつだ。これじゃ云い訳わけが立たないや。明日の朝は——これはえれえことになつたぞ」

五郎造はぶつぶつ独ひとりごと白しろをいつては、腹を立てていた。吉治の怪我で、彼はなにか大変困つたことに直面しているらしい様子だつた。

生命救助者を装う髭蓬々の男は、濡れていた半纏が乾いたというので、これに着かえながら、そろそろ暇いとまご乞いをする気色けはいに見えた。

「おう、もうお帰りですかい。そうだ、お前さんの名刺を一枚下さいな。お礼にゆかなきやなりませんからね」

すると半纏男は笑いながら、

「お礼には及びませんよ。それに、私は名刺なんか持っていないんです。月島二丁目に住んでいる正木正太まさきしやうたという左官なんです」

「ええつ、左官。するとお前さんは、近頃のコンクリート工事なんかやったことがあるのかね」

「ええ、すこしは覚えがあるんですが、大した腕でもありませんよ。なにしろ仕事がなく、毎日、あっちこつちをうろついているのですからね」

「ふふーン、そうかい。そういうことなら、正太さんとやら、わしは一つお前さんに相談があるんだがね。いや、もちろんうちの者を助けてくれたお礼心から、ちとばかりお前さんに儲もうけさせようというんだ。実はね、ま、こつちへ来なさい」

と五郎造は正木正太を病院の廊下へ連れだした。深夜のこととて他に面会人も歩いてい

ず、そのあたりは湖水の底のようにしーんと鎮まりかえっていた。

「こいつは他言して貰っちゃ困る。お前さんだから、信用してうちあけるんだが——」

と前提して、五郎造親方は、いまやりかかっている或る秘密の土木工事があつて、そこへ働きにゆく気はないか、なにしろ人員は厳選してある上に、一人足りなくても先方から喧しくいわれるのだ。今夜吉治が怪我をってしまったため、明朝は左官が一人足りなくなる。そのために先方からどんな苦情をうけるかと思うと、彼は気が気でないのだと包み隠さずにいつて、この寒中に額にびっしりとかいた汗を手巾で拭つた。

「幸いお前さんが、左官をやれるというから、これはもつげのことだ。これも因縁だと思うから、一つやつて見ては」

「でも、なんだか気味がわるいですね。秘密の工事なんて」

「いや、そう思うだけのことだ、やっていることは普通の工事なんだ。ただ行くときと、帰るときに、目隠しをされるといだけのことさ。手間賃は一日七円だ。普通の倍だぜ」

「だって、いくら吉治さんが怪我でゆけないとしても、全然新顔の私が行つたんじゃ、先方入れないでしょう」

「うん、そのことだが——」と五郎造は幾分苦しそうに眼玉を白黒させていたが、

「なあに、生命いのちを助けてくれたお前さんのことだあね、先方が信用するように、わしの親類とかなんとかいっとくよ。何しろ職人の数が揃わないことには、前もってちゃんと決っている工事がそのように進まないことになるから、わしはうんと叱られた上、大変な罰金をとられることになつてゐるんだ。だからお前さんがいつてくれりや、吉治の分も、わしの分も、二重の生命の恩人となるわけだよ。ね、いいだろう。一つうんと承知をしてくれよ」

正木正太と名乗る半纏着の男は、ようやくのことで五郎造の薦めすすを応諾おうだくした。そしてシンプソン病院を辞去しきよしたのであるが、彼は寒夜かんやの星を仰ぎあおながら、誰にいうともなく、次のようなことを呟つぶやいたのだった。

「どうも古くさい狂言きやうげんだ。だが、古いものは古いほど安心して使える、といわれるが、なるほど尤もつともな話だなあ」

忠魂塔

その当時、極東には国際問題をめぐって、ただならぬ暗雲が立ちこめていた。

中国大陸には、大きな戦争が続いていたし、その戦争に捲きこまれていないいくつかの大国も、てんでに武装戦備を整えて、いつでも戦雲渦巻くその中心へ向って進撃できるように、すっかり準備は出来上っていた。

従つてわが東京における諸外国大使の動きも非常に活潑であつて、或る物識りの故老の言葉を借りると、歐洲大戦当時、ロンドンにおける外交戦の多彩活況も、これには遠くおよばないそうである。

中でも、国民の注目を一番強く集めていたのは、老獺ろうかいなる外交ぶりをもつて聞える某大国であつた。

日中戦争が始まつて間もなく、既にもうこの某大国の動向が、国民の注目を惹いたものであるが、その当時はどつちかというと、中国の方に相当積極的な同情を示していた。ところがその後、わが日本軍が各地に輝かしい戦績をおさめ、極東のことに關しては日本の同意なしには何一つやれないような事態となつたと知るや、某大国はいちはやく態度を豹ひょう変ようへんし、内面はともかくも表面的には中国に対する同情をひっこめ、そしてひたすら日

本の御機嫌をとりむすぶように変った。それはまるで小皺こじわのよった年増女のサーヴィスのように、気味のわるいものだった。

その年の秋が冬に変わろうという十一月の候、例の某大国は日本国民の前にびっくりするような大きな贈物をするというニュースを披露ひろうした。それはかつて歐洲大戦の砌みぎり、遙々はるばる歐洲の戦場に参戦して不幸にも陣歿したわが義勇兵たちのため、建こんりゆう立りゆうしてあつた忠魂塔と、同じ形同じ大きさの記念塔をもう一つ作つて、わが国に贈ろうという企くわだてであつた。

正直なところ、わが国民は某大国のこの好意に面喰めんくらつた。何につけ彼かにつけ日本の邪魔ばかりをしている憎い奴だと思つていた某大国から、この由ゆいしよ緒しよある途方もない大きな贈物をおくられて、愕おどろかぬ者があるうか。

その忠魂塔は東京市に建てられることになつた。そのために市の吏員は、敷地を公園にもとめて探しまわつた結果、S公園内に建てるということに決つた。そして大急ぎでもつて御影石みかげいしの台石だいいしを作ることになつた。

東京市内では、この忠魂塔のことでよるとさわると話の花が咲くのであつた。

「あれで見ると、某大国もやつぱり日本に敬意をもつていないわけじゃないんだね」

「うん、僕も平生へいぜいすこし悪口をいいすぎたよ。あの記念塔は写真で見たが、高さが五十

メートルもあるというから、とてもでっかいものだよ。塔下の一番太いところの直径が二メートル近くもあるそうだからね」

「ほほう、そうか。たいへんな物だね。そんな大きなものをどんな風にして日本まで持つてくるつもりだろうか」

「さあ。もちろん塔の途中からいくつかに小さく折って持ってきて、こっちで、接ぎあわすんだらうよ。そのままじゃ、とても船にも載せられないし、陸へあげても列車にも積めないし、町を引張りまわすことも出来やしないからね」

そんな話が、あつちでもこっちでも取り交かわされているうちに、更に国民を愕おどかせるニュースが入ってきた。

それは例の忠魂記念塔を、某大国の一等巡洋艦がわざわざ積んで、日本まで廻航してくるといふ報道であつた。

「本国政府は、この機に際し、親愛なる日本国民に敬意を表さんがため、記念塔を特に一等巡洋艦マール号に積せきざい載してお届けすることにしました」

とは、駐日某大国大使パット氏が、新聞記者団を引見して、莞爾かんじとして語ったところであつた。

その新聞記事を読んだ国民は、更に某大国の厚意に感激した。

しかし一部の識者は、逆に眉を顰めた。

「これはどうも変だね。某大国はこの頃になつて急に日本を好意攻めにするじゃないか。

忠魂記念塔を新調して贈つてくれるというのさえ大変なことなのに、その上、昨年建造したばかりの精鋭マール号をその荷船として派遣するなんて、ちと大袈裟すぎると思わないか」

「時局から新造艦マール号の性能試験をやる意味もあるんじゃないかね」

「そんなことなら、なにも極東まで来なくてもよさそうなものだ。これは何か、日本近海の測量を目的にしているのじゃないかな」

「そんなら何もマール号を煩わさずとも、中国艦隊にやらせばいいことじゃないか」

「どうも分らん。しかしマール号の極東派遣をうっかり喜んでいられないということだけは分る」

遣日艦マール号

この遣日艦マール号は、十二月一日、無事芝浦埠頭に着いた。

出迎えと見物とに集った十万人ちかい東京市民の間を、マール号の陸戦隊員二百名が、例の記念塔を砲車牽引車けんいんしゃに積んで、肅々しゆくしゆくと市中を行進した。

それを見ると忠魂記念塔は、長いままではなく、七つの部分に切断され、一つ一つがそれぞれ前後二台の牽引車によって搬はこばれていったのである。

派遣部隊の長列は、町の大通りを大きな音をたてて行進し、この塔が建設されるS公園の前を通り、やがて某大国外使館の中に入った。

公表されたところによると、このバラバラの記念塔は、大使館内で荷を解かれ、罅ひびや傷の有無を十分に確かめた上で、三日後には華々しくS公園へ搬はこびこまれ、盛大な儀式が行われることになっていた。

その前夜、大使パット氏は、AKのスタディオから全国中継をもって、忠魂記念塔の到着を披露し、

「——どうか御安心下さい。本国から随伴してきた工こうしやう廠ちやう技師の厳密な試験によりまし

て、七個からなる忠魂塔の各区分には、いささかの罅も入っていない実に立派なものであるということを証拠だてることができました。いずれ明日の式場で、これをお目に懸けられるわけでございますが、あとは卓越した日本の土木建築家の手によりまして、足場を組んで建てていただくつもりでございます」

などと挨拶あいさつ放送をやつて、全国民をまた一入感激ひとしおさせたのであつた。

その忠魂記念塔は、今ではS公園内に天空てんくうを摩まして毅然きぜんと建っている。そして市民たちは、毎日のようにこの新名所の前に集まつてきて、かつて欧州の野に赤き血潮を流した勇敢なる日本義勇兵の奮戦しんぶりを偲しのんで、涙なみだを催もよおしているのであつた。

そして今では、一般国民の某大国に対する感情も以前とはことかわり、たいへん穩おだやかになつたのであるが、果して某大国はわが帝国に心からなる敬愛を捧げてくれているのであろうか。

いや、それは残念ながら、そうではなかつたようである。たとえば今、外国密偵団の監視をやっている有名な青年探偵帆村ほむらそうろうく荘六が、数日前その筋から示唆しさをうけた話の内容について考えてみるのが早わかりがするであろう。

「某大国の南太平洋における防備は、わずかこの半年の間に、従来の五倍大になつた。飛

行機、爆弾、燃料、食糧、被服などは、どの倉庫にも一杯になって、中には急造バラックの中に抛りこまれていられるものもある。某大国は明かに日本に対して攻撃姿勢をとっているのだ。わが帝都をはじめ、各地の重要地点を一挙にして空爆しようと思つてその機会を狙つてゐることは実に明かである。しかもこの際最も注意を要することは、かの老獪なる某大国の作戦計画として、開戦の最も初期において帝都における諸機関を一挙にして破壊し去ろうとしてゐるらしい。われわれの知りたいのは、かの某大国がいかなるところを狙つてゐるかということだ。それが分れば、敵の今後の戦略がかなりはつきり見当がつかうというものだ。帆村君。この際、君の奮起を望むというのも、一にこの点に皇国の興廢が懸つてゐるからだ」

この話で見ると、某大国はキューピーの面を被りながら、その面の下でもつて恐ろしい牙を鳴らしてゐるとしか思われない。

こうして某大国の戦意ははつきり読めるのであるが、早く知らなければならぬことは、これから某国がとうとうとしてゐる実際の攻撃計画がどんなものであるかということだった。東京市についていうなら、一体某大国の爆撃機は、どこどこを狙つてゐるのだろうか。破甲弾はどことどことに落とすつもりか。焼夷弾はどの位もつて来て、どの辺の地区に

抛なげおとすのであろうか。また毒瓦斯どくガスだん弾はいかなる順序で、いかなる時機を狙まつて撒まくのであるかなどいうことが、この際早くわかつていなければならぬ。

もちろん軍部をはじめ諸官省や諸機関においては、最大の注意力を傾かたむけて、この恐るべき外敵の攻撃を防ぐことを考えている。しかしそれには、敵の手にどんな武器が握にられてあるかを知ることが出来れば、防ぐにも一層便利でもあり、かつ有効な措置がとれるのであつた。

帆村莊六は、某大国の機密を何とかして探りあてたいと、寢食を忘れて狂きやうほん奔ほんしたが、敵もさる者で、なかなか尻尾をつかませない。流石さすがの帆村も、ちと腐くさり気味きみでいたところ、ふと彼の注意を惹ひいたデマ罰金事件があつた。

それは警察署の聴取ききとりしよつぷり書綴しよづいのなかから発見したものであつたが、事件は築地の或る公衆浴場の流し場で、仲間同士らしい裸の客がわあわあ喋しゃべっているのを、盗み聞きしていた一浴客よつきゃくが、後にまたそれを他の者へ得々として喋しゃべっているところを御用となつたものであつた。

そのデマによると、当夜浴場の流し場で喋しゃべっていた本人は、どうやら左官職さくわんしやくらしかつたという。彼は仲間連中から、どうも手前てめえはこのごろいやに金使いが荒いが、なにか悪いこ

とをやっているんじゃないかと擲^{から}揄^かわれ、彼の男は顔赤らめて云うには、実はここだけの話だが、この頃おれは鳥^{ちよつと}渡^とうまい儲^{もう}け仕事にいつているんだ。毎朝或る場所へゆくと、そこで目隠しをしたまま自動車に乗せられ、一時間半も揺^ゆられながら引き廻^{まわ}された揚^{あげ}句、変な密室のなかに下ろされる。そこで一日左官の仕事をやっていると、夕方にはまた目隠しをしたまま自動車に乗せられ、元の場所へ帰ってくる。この仕事は気味がわるいが一日七円にもなるので、我慢していつているんだと、いささか得意げに語っていたという。

仲間のものは、その男の儲ける金のことよりも、目隠しをしてどこかに連れてゆかれるという獵^{りようき}奇^き的な話がすっかり気に入ってしまった、へへえ、それで手前はそこでどんな仕事をしているんだと聞けば、かの男は、それがどうもよく分らない仕事なんだが、とにかく三百坪ぐらいもあるとても広くて天井の高い工場みたいな建物の床を漆^{しつくい}喰^くみたいなもので塗っているんだが、その漆喰^{しつこ}が変な漆喰^{しつこ}で、なかなか使い難^{にく}いやつなんだ。そのために仕事もなかなか思うように進まず、まだ半分ぐらいいしか塗っていないという。

すると友達が、その三百坪もあつて背の高い謎の工場というのは、どこにあるか、窓から見える外の様子とか、近所から聞える物音とかで、およそこは江^{こうとう}東^{とう}らしいとか大森らしいとか分りそうなものじゃないかという、かの男ははげしく首をふって、うんにや

それが分るものかい、その今いった工場みたいな建物には、窓が一つもついていないんだ。全部壁で密閉してあつて、電灯が燦然さんぜんとついている。物音なんて、なにも入って来ない。深山しんざんのなかのように静かなところさと答えた。

じゃあ、どこか地下室なんだろうと友達がいうと、そうじゃない。高い天井を見上げると、亜鉛板あえんばんで屋根がふいてあるのが見えるから、地下室ではなくて、これはやはり地上に建っている普通の建物にちがいないと断言したというのである。起訴されたデマ犯人は、これについてなお自分の逞たくましい想像を織り交ぜて喋っていたところから、遂に罰金五十円也の申渡しを与えられたと書いてある。

帆村莊六は、この聴取書の話をつたいへん面白く思った。そこで彼は一つの計画をたてて活動に入ったのであるが、始めに述べた築地本願寺裏の掘割における活劇も、実はこのデマ事件からの発展なのであつて、堀のなかに投げこまれて大怪我をした吉治は、かの浴場で仲間に、ここだけの話をぶちまけた主であり、警官に見て見ぬふりをさせ、皇国の興廢にかかるとはいえ、この吉治に心ならずも傷害を与えた正木正太という左官こそ、とりもなおさず帆村探偵の仮称かしようにちがいがなかつたのである。

身代りの探偵

左官正太を名乗る帆村探偵は、巧みに吉治の後あとがま釜に入りこんだ。

その翌朝は、親方五郎造から注意されたとおり、午前六時すこし前には早くもこの一団の集合場所である南千住みなみせんじゆの終点に突立つたっていた。彼の手には左官道具と弁当箱が大事そうに握られていた。

親方の五郎造が最後にやってきた。それでこの南千住の終点に集まる六人組の顔が全部そろったのであった。五郎造は、探偵帆村の化けこんでいるのとも知らず、正太と名乗るこの新入りの左官のことを、これは自分の女房いとこしの従弟だ、どうか仲よくしてやってくれと、他の仲間仲間に引合わした。

帆村探偵は、それから先どうなるのかと、ひそかに好奇の眼を光らせていると、やがて十分も経ったと思う頃、

「やあ、来た来た」

と仲間の一人がいうので、その方を見ていると、一人のよぼよぼの婆さんが怒ったような顔をして一行に近づいてきた。

「——おう親方、吉治がいねえじやねえか」

と、婆さんは伝でん法ぽうな口を利いた。

「うん、そのことだよ。実は——」

と、いって、親方はまた吉治が不慮ふりよの怪我けがで入院したことから、その代りに女房の従弟の正木正太を連れて来たが、この人物は保証するというようなことを、婆さんの耳許みみもとに囁ささんでふくめるように説明しなければならなかった。

「おい、大丈夫かい。間違いはなからうね」

と婆さんは、眼をぎよろりと光らせて五郎造と帆村探偵とを睨にらんだ。

帆村は、頭を搔かきながらぺこぺこ頭を下げた。いかにも職人らしい風を装よそおって。

ようやく婆さんの信用をかちえて、一行は歩きだした。やがて着いたところは、ごみごみした横丁にあるバラック建ての婆さんの家だった。その中に入ってゆくと、土間伝いに裏に抜けるようになっていた。そこにまた一つの潜くぐり戸があつて、それを婆さんが開けてくれた。

そこを潜ると、黴かびくさい真暗な倉庫の中に出る。妙なところへ連れこまれたなあと思っ
ているうちに眼が暗やみになれてくる。するとこのただっ広い倉庫の中に、牛乳を搬はこぶのに使
うような一台の箱型トラックが置いてあるのに気がついた。

すると何処からともなく人が出てきて、この運転台に乗った。別の人が、ぱつと五燭しよくの
電灯をつけた。その人は妙な形の頭巾ずきんをもっていて、それを五郎造の率いる一行の一人一
人の頭の上からすぼりと被かぶせた。

帆村もとうとうこの頭巾を被せられてしまった。息のつまるような厚い布で出来た囊ふくろだ。
頸くびのところまでバンドを締め、御丁寧にがちゃんど錠かぎがかかった。こうして置けば、いくら
頭巾を脱ぬごうとしても脱げない道理だった。

それが済むと、帆村たちは箱型トラックの中に手を執とつて入れられた。扉がぴちんとし
まって、中から鍵がかかる。誰か一人、傭やといぬし主しの側の番人が乗りこんでゆくらしい。誰
も物を云う者がいない。

そのうちに、倉庫の戸がぎいぎいと開く音が聞え、それとともにトラックは徐じよじよ々に動
きだした。いよいよ秘密の場所への旅行が始まったわけであった。

ごどんごどんと揺ゆられながら、帆村はトラックの通りゆく道筋を、一生懸命に暗記しよ

うとつとめた。

右か左かへ曲ると、慣性の理によつて、どつちかへ身体がぐぐつとお圧されるので、それとわかつた。

狭い道では、車はごとごととしきりに揺れたし、広い道へ出ると、すうすうと滑るよう
に走つた。

しかし運転手は非常に気をつけているようで、しばらくゆくとスピードが殆んど一定となり、道を曲ることさえなくなつた。もちろん十字路のストップは一度も喰くわなかつた。なんだか郊外の方へ一本道にずんずんと進んでゆくように感ぜられたが、そのうちに数台の消防自動車のサイレンが喧やかましく街を走っているのが聞えたので、ここはやはり東京市内だなどと思つた。

それからまだ小一時間もトラックはごとごとと走つた揚句あげく、ごろごろと下り坂を下りてゆくような気がしたと思つたら、やがて車はごとんと停つた。

これでいよいよ一時間半の長い旅行を終つたのである。ここは何処であるのか、帆村には一向見当がつかなかつた。道順も始めのうちは覚えていたが、途中から皆か目もくわからなくなつた。

一行はトラックの中から、そろそろと下に下りた。長い廊下を手を引き合つて歩いてゆくと、やがて扉の明く音がして、一行はまたその中に導き入れられた。すると一緒についできた番人が、頭巾の錠をがちやんがちやんと外はずしてくれた。帆村は頭巾をかなぐり脱ぐと、深い息をしながら、あたりを見廻した。

(なるほど、ここだ。あの聴取書に書いてあつた三百坪の天井の高い工場とはこのことをいうのだな)

話にあつたとおり窓が一つもない。電灯は煌こうこう々とうとついていて昼間のように明るいが、ここにいたのでは昼だか夜だか分らない。

五郎造は引率いんそつしてきた五人の左官を呼びあつめると、今日の仕事の分担をそれぞれ云い渡した。そしてすぐさま仕事にとりかかった。

帆村の仕事は、米べいさんという一人の左官について、一緒に床に特殊の漆喰しつくいを塗ることだった。

それとなく辺りを窺うかがうと、この室内には一行六人の外に彼等を連れてきた逞たくましい髭面ひげづらの番人が一人、そのほかにこの工場の人らしい職工ズボンを履はいた男が三人いて、こつちの仕事ぶりをじつと監視していた。

五郎造はこの三人の男のことを、松監督さん、竹監督さん、梅監督さんと呼んでいたが、もちろんそれはこの中でふちようの符牒であるにちがいがなかった。

さあ、ここが帆村のためには重大な戦場なのであった。このがらんとしたトタン亜鉛屋根の工場とも倉庫とも見える建物内こそ、そこに秘められている大秘密をあばきつくすため、彼の智囊ちのうを傾けつくさねばならぬ大戦場だった。しかしこの簡単な建物の中から、一体どんな手懸りが得られるというんだろう。半ばなかやりかかった漆喰の床ゆかと、チョコレート色の壁と、トタン亜鉛板を張った天井と、簡単な鉄の肋材ろくざいと、電灯と、たったそれだけの集った場所に過ぎない。果してこの中から、思うような重大秘密が嗅かぎだせるものであろうか。

臭いの研究

米さんに従って、帆村探偵は黙々と本職らしいこて鑿を動かしつつけた。

器用な彼は、平常へいぜい暇のあるごとに、色々な仕事を習い覚えていて、今度のような万一

の場合には、すぐどんな職人にでも化けられるように訓練を積んであった。

帆村がいま踏んでいる足の下は、相当しつかりしたコンクリートの床になっていた。漆喰をその上に、約二センチメートルの厚さで塗ってゆくのであった。

この漆喰は、かねて話に聞いたとおり、普通の漆喰とは異ったものであった。石灰と赤土^{あかつち}だけは普通のものを使うが、ふのりは使わず、その代り何だか妙にどろどろしたものや、外に二、三種の化学薬品を混入するのであった。それらを交ぜ^まあわすのがなかなか厄介であり、それからうまく交ざった後は、早いところ塗ってしまわないと、直ぐ固まってしまうのだった。つい凹^{でこぼこ}凸が出来たり、罅^{ひび}や筋が入る。すると松竹梅の三監督がやってきて、やり直しを命ずる。なかなか骨の折れる仕事だった。

この特殊な漆喰は、一体どんな特長があるのであるのだろうか。

帆村の気づいたところは、第一に非常に早乾^{はやがわ}きがすること、第二に、固まってしまえば鋼^{はがね}のような強い弾力を帯びること、第三に耐熱性に富んでいるらしい非常に優秀な漆喰だった。すくなくとも市場には、こんなに勝れた漆喰^{すく}が知られていない。

そういう優秀な漆喰をここに敷くという目的は、どういうところにあるのだろうか。

普通の機械工場なら、こんな漆喰を塗るまでもなく、その下のコンクリート土台だけで

十分であった。贅ぜいたく沢な場合でも、その上に僅かのアスファルトを流しこめばいいのだ。それにも拘かかわらず、普通以上の強きょう鞞じゆんさを漆喰で持たせようというには、何か訳がなければならぬ。この平々へいへいたんたん坦々たんたんたる床の上に、そも如何なる物品が載るのであろうか。帆村はせつせと鰻を動かしながらもそれを想つて、何とはなく背中がぞくぞくと寒くなるのを覚えた。

その日の所見を、その後、某大官の前で、帆村は次のように報告している。

「なんとかしてその漆喰の見本を、せめて定性分析の出来るくらいの少量でも持つてこようと思いましたが、監視が嚴重なので控えました」

「爪の間に入れるとか、頭髮の中にこぼすとか、なんとかいい方法がありそうなものじゃないか」

「そんなことは向うで百も承知ですよ。いよいよ仕事が終つたというときには、僕たちは強制的に風呂の中に入れられてしまうのです。その風呂には、女がいますね。僕たちの頭のとつぺんから足の爪まですっかり洗つてくれるのです。爪はきれいに截きつた上、御丁寧にブラッシュをかけるという始末です。外へ出ると、服はすっかり着がえさせられます。履物はきものやマットまで変るのです。恐らく嚴重を極きわめていますよ」

「ふーむ、莫迦ばかに細心にやっているんだね」

大官は心から感嘆している様子だった。

「ねえ帆村君。これはあまり大きな声でいえないことだが、君がいま行っている仕事場は、ひよつとすると何かわが警備関係の防空室とかいう筋合のものではないのかね」

「ええ、それは——」

「もしそうだとすると、君は自国の機密建物を調べていることになって、大損おおぞんをするよ」

「そうです。貴官あなたの仰おっしゃ有るとおりの疑問を、僕も持ちました。僕も実は最初からそれを考えていたんです。しかし僕はあの建物のが、すくなくとも我が警備関係のものではない証拠しやうこをつきとめたのです」

「ほほう、それはよかった。で、その証拠しやうこというのは、一体どんなものだ」

大官は眼鏡めがねごしに、ちらと黒眼を動かした。

「その証拠しやうこというのは、臭いなんです」

「えっ、臭いとは」

「臭いというものについて、一般の人はわりあい不注意ですよ。しかし臭いの研究というものには莫迦ばかにならぬものです。日本人が寄れば、なんとなく沢庵たくあんくさいといわれます。

これはつまり日本人の身体からは、食物の特殊性からくる独特の臭いが発散しているので、日本人同士では、お互たがいに同じ沢庵臭をもっているものでそれと分りませんが、外国人にはそれがたいへんよく匂う」

「うむ、なるほど。で、君は例の仕事場でもって、何か特別の臭いを嗅ぎつけたのかね」

「そうです。僕はトラックを下りて、廊下をひたつたてられてゆくときに、早くもその独特の臭いに気がつきました。浴場で着物を着がえたりするときにも気がつきました。それから監督の傍によつてもその臭いが感ぜられました。断じてあの場所は、日本人の経営している場所ではありません」

「それは大変だ。でもその監督は日本人じゃないのかい」

「中国人ですよ。浴場にいる女も、やはり中国人だと思います」

「じゃ、それは中国人の工場でもあるのかね」

「いや、臭いというやつは、もつともつと複雑です。あの場所の匂いというのがあります。それはどうも、あのチョコレート色の塗料のせいだと思いますが、これは些いさか僕の自信のある研究なんです、あの建物は某大関係のものだと思いますよ」

「そうか、某大か」と大官は大きく肯うなずいた。

「それは偉大な発見だが、しかし惜おしいことに、この場所が分らない」

「場所は分らぬことはないと思います。明日僕の後を誰かにつけさせ、箱自動車の後を追跡すればいいではありませんか」

「なるほど、そうやればいいわけだね」

大官は莞爾かんじと笑った。

自記地震計

その翌朝のことだった。

帆村探偵はまた左官の道具と弁当箱とをさげて、南千住の終点へいった。

私服刑事からなる別動隊は、帆村の行動を遠方からじっと見守っている。

定刻の午前六時になった。

「変だなあ、誰も来ないじゃないか」

定刻になつても、昨日の顔ぶれは誰一人として集つて来なかつた。肝腎かんじんの五郎造親方さえ顔を見せなかつた。

「これは失敗しまつた」

帆村が叫んだ。もう遅かつた。敵はすっかり勘づいてしまつたらしい。

仕方なく私服刑事の一隊に命令をさずけて、トラックの入っている筈の倉庫の中を覗のぞかされたが、そんなものは入っていないということが分つたばかりで、何の足たしにもならなかつた。

どうして帆村のことが分つたのだろう。

シンプソン病院に電話をかけて、怪我人原口吉治の様子をたずねると、看護婦が電話口に現れて、あの方なら昨夜御退院になりましたという。愕おどろいて聞きかえしたが、全くそのとおりだった。引取人はと聞けば、どうやら親方の五郎造らしく思われた。

貴重なる搜索網が、ぷつんと破れてしまった形だった。帆村は地団駄じだんだふんで口惜くやしがつたが、もうどうすることも出来ない。

とりあえずこの大事件を大官に報告して、指揮あおを仰いだ。

怪我人の原口吉治が、他の病院に入っているかも知れないというので、京浜地方に亘つ

て調べてみたが、得るところがなかった。シン普森病院では、それほど大した怪我でなかったから、入院しないでもいいかもしれないという話だった。

とにかく大きな魚が逃げた。

この上は、夜に入つて、五郎造親方が帰宅するところを捕とらえて、これを説論せつゆするほかない。お前も日本人だろうが、某大国に雇われているの知らないわけじゃなからう。そんならあの工事場の秘密を知っているかぎり打ち明けろ、などと責せめるより外ほかはないのだ。

ところが、物事がうまく行かないときは、どこまでも失敗がつづいた。というのは、五郎造がその夜とうとう帰宅しなかったことである。

尤もつともその夜ふけ、家には速達が届いた。それには五郎造の筆蹟ひつせきでもって、工事の都合で当分向うへ泊りこむから心配するなど書いてあつた。

奇怪なることである。どこから知れたことか分らないが、とにかく向うでは気がついて職人たちを帰宅させないことにしたのだ。そうなると、こっちの搜索は殆ど絶望というほかない。

「うーむ、失敗も失敗も、大失敗をやってしまった」

帆村探偵は、頭をおさ圧おさえて懊惱おうのうしたが、もはやどうにもならなかつた。

そうかといつて、これほどの大事件を、このまま捨てて置くわけにはゆかなかつた。官憲はともかくも、帆村自身はなんとか再び例の秘密工事に達する路を発見したいものと日夜そればかりを考究した。

それから一週間ばかり後のことであつた。

帆村の熱情が神に通じたのか、彼はゆくりなくも重大なる事柄を思い出した。

それは例の工事場で働いていたとき、その中ではないが、どこかその附近でもつて、しきりに杙^{くい}打ち作業をやっているらしい地^じ響^{びき}を聞いたことであつた。

それについて、彼は今まですっかり忘れていた重大なる手懸りを発見したのだ。それはその杙^{くい}打ちの音が、とんとんとんとんという具合になめらかなに行かず、或るところで引^{ひっか}懸^かるようにとんとんとんという特徴のある音をたてることであつた。歯車の歯の一つが欠けているのか、或はまたロープにくびたところでもあるのか、とにかく不整な響を発するのであつた。

「こいつは締^しめた。もつと早く気がつけばよかつたんだが」

帆村は躍りあがつて悦^{よろこ}んだ。彼はとんとんとんという不整音^{ふせいおん}の地響を、どう利用するつもりであろうか。

彼はすぐさま家を飛びだして、帝国大学の地震学教室に駆けつけた。そこで教授に面会して、携帯用の自記地震計の貸与方を願ひいでた。教授は事情を聞いて、快く教室にあるだけのものを貸してくれた上、数人の助手までつけてくれることになった。

帆村の眼は、久しぶりに生々いきいきと輝いた。彼はこの自記地震計をもって、かのとんとんとんとんとという不整な地響のする地点を探しあてるつもりだった。もちろんそれはまず某大関係の建物のある地域から始めてゆくことに考えていたが、それにしても彼は、まず真先にこの地震計を据えつけたい或る一つの場所を胸の中に秘めていた。

東京要塞

五郎造親方は、この頃になって、脱のがれられない自分の運命を悟さとるようになった。

始めは、いい儲もうげばなしとばかりに、何の気もなく手をつけた仕事だったが、一週間も前から、彼はこの仕事の性質の容易ならぬことに気がついていった。身の危険をも感じない

ではなかったが、今となつてはもうどうにもならない。一行六人は、牢獄のなかに拘禁こうきんされているのも同然の姿だった。

大体の工事が済んで、左官の仕事はもうあまり要いらなくなつた。それなのに、誰が頼んでも帰宅を許そうとしない松竹梅の札をつけた監督連だった。

一行六人は、毎日することもなく一室に閉じこめられ、飽ほう食しょくしていた。

或る日、五郎造親方は、只一人呼び出された。左官の仕事道具をもつて出てこいというのであるから、これは仕事が出来たのに相違ないと思つた。珍らしいことだ。これで四日間というものを、仕事なしで暮したわけだ。

五郎造親方は、久しぶりで長い廊下をとおり、見馴れた小さなくぐり戸から、例の工事場へ入つていった。だが彼の一生において、このときぐらい胆きもを潰つぶしたことはなかった。

「呀あつ、——」

といったきり、彼は腰をぬかして、へたへたと漆喰しっくいの上に坐つてしまった。

見よ！ さきごろまでは、何一つ入れてないがらんとした空あき部屋だったのが、今はどうであろうか。その口径、およそ五十センチに近いと思われる巨砲が、彼の塗りこんだ漆喰の上に、どっしりと据えられてあるではないか。それは主力戦艦の主砲よりはるかに長

さは短いが、それでも砲身の全長は五メートル近くもあった。砲の胴中は、基部きぶにおいて直径が一メートル半ぐらいあった。ずんぐりとした大攻城砲であった。

なんのための攻城砲か。まさかこの建物の中に、巨砲が据えられるとは気がつかなかった。五郎造でなくても、誰でもこれには腰をぬかすであろう。

巨砲の蔭から、士官が三人ばかり姿を現わした。

「おおつ」

五郎造は全身をぴりぴりとふる慄わせた。

彼の三人の士官こそは、見紛みまがうかたなく某大国の海軍士官であった。五郎造は新聞紙上に、ニュース映画に、またS公園における忠魂塔除幕式の日、その某大国将兵の制服をいくどとなく見て知っていたのである。

(夢を見ているのではないか)

と疑つて、太股ふとももをぎゅつとつねつてみたが、やはり痛い。だからこれは夢ではない。

夢ではないとしたら、この場の有様は、なんとという戦せん慄りつすべきことではないか。

砲架の上を歩いていた士官は、松監督をさし招くと、なにごとか命令した。

松監督は畏かしこまって、五郎造のところへ飛んできた。

「おい、やり直しの仕事があるんだ。大急ぎでやってくれ。なに立てないって。そんなこととでどうするんだ。じゃあ、こうしてやろう」

と、靴の先で、五郎造の腰骨こしほねをいやというほど蹴上げた。

五郎造は憤怒ふんぬのあまり、ふらふらと立ちあがることに成功した。

「おう監督さん。おれたちは今まで黙って仕事をしていたが、この大砲はどこの国のものなんだね」

と、彼はぶるぶる慄える指さきで巨砲を指した。

「なんだ。今ごろになって、そんなことを聞くのか。分っているじゃないか。これは日本の大砲じゃないよ」

「ふむ、するとどこかの国の大砲だな。家の中にこんな秘密の砲台こしらを拵こしらえて、一体どうする気だ」

「そんなことを俺が知るものかい。俺もお前と同じように、傭やとわれている身分だよ。なんでもいいから、お金を下さる御主人さまのいいつけ通りにしていれば間違いはないんだ」

「うむ、やっぱりそうか。じゃ、貴様も使われているんだな。俺はもう今から仕事をしないぞ。日本の国内にこんな物騒ぶつそなものを据えつけるような卑怯な国の人間に、いい具合

にこきつかわれてたまるものか」

「なんでもいいから早くやれ、さもないとお前の生命いのちは無いぞ。ぐずぐずすればこつちの生命まで危いわ」

松監督はしきりに五郎造をつつつくが、五郎造はもうなんととっても云うことを聞かなかった。

砲架の上にいる外国士官は、それを見るとつかつかと降りてきた。そして流りゅう暢ちやうな日本語で、

「貴方、なぜ早くやりませぬか。云うとおりしないと、この大砲を撃ちますよ。この砲口はどこを狙っていると思いますか。これを撃つと、大きな砲弾がとんでいって、或る重要な官庁を爆破してしまいます。そうすると、日本の動員計画も作戦計画も、なにもかも灰になってしまつて、日本は戦争することが出来なくなります。どうです、撃った方がよいですか」

「卑怯者。日本人には、そんな卑劣な陰謀をたくらむ奴なんかいないぞ」

「——それとも平和的に解決しますか。わたくしの政府は、いま日本政府に平和的条約を申込んであります。それが聞きとどけられるようなら、これを撃たないで済むのです。貴

方がいま乱暴して、わたくしたちの云うことを聞かないと、やむを得ずこの大砲を撃たねばなりません。どっちにしますか」

と、目の碧い士官は、五郎造をつかまえて子供だましのようなことをいった。しかしその脅しの文句の中にも、いまこの巨砲が某官庁に照準せられているというのは本当なのであろう。測量学の発達している今日、大砲の射手が目標を見て狙わなくとも、他の方法で観測した結果により、目標を見ずともうまく照準をつけることができるわけだった。ああしかし、この恐るべき攻城砲が垂鉛屋根の下に隠されているなんてことを、誰が知っているだろうか。

なんとかしてこの大秘密を知らせる方法はないものか。五郎造はもう自分の生命のことなどは思いあきらめた。

そのときであった。

奥まった扉ががらつと開かれると、顔を真青にした某大国土官が、一隊の兵士を連れてとびこんできた。

「大佐どの、大変であります。いま九機から成る日本の重爆が現れて上空を旋回しています。どうやらこの攻城堡壘が気づかれたようですぞ」

「なに、重爆が旋回飛行をやっているって？ それは本当のことか」

「本当ですとも。ああ、あのとおりに聞えるではありませんか、敵機の爆音が……」

「うむ、なるほど。これはいけない。東京要塞長はどこにいられるだろう。すぐ指揮を仰がねばならぬ」

そういつているところへ、けたたましい電話のベルが鳴った。

大佐といわれた士官はその方へ飛びついていったが、受話器を握って大声に喚わめいた。

「——はっ、そうでありませうか。こっちの用意は出来ています。いつでも発射できます。はっ、すぐ攻撃しろと仰おっしゃ有るのですか。畏りました。では号令をかけます」

大佐は電話を置くと、隊員の方を向いて、

「気をつけ。——総員、戦闘準備。主砲発射かた方用意！」

いよいよ悪魔のような巨砲が、わが日本帝国の心臓部めがけて砲撃を始めることとなった。五郎造はもう逆ぎやくじよう上してしまった。いきなり兵をかきのけて、砲架ほうかによじのぼろうとした。

「こら、なにをする」

どーんと一発、傍にいる下士官のピストルから煙が出た。五郎造は棒のようになって、

砲架から転げおちた。

恐怖の瞬間は迫る。――

しかしもうそれ以上、この物語をつづける必要はない。なぜなれば、その次の瞬間百雷が一時に落ちて砕けるくだような大爆音がこの室に起った。亜鉛屋根トタンを抜けて真赤な焰の幕が舞い下りたと思つた刹那せつな、砲身も兵も建物も、がーんばりばりと大空に吹きあげられてしまったから。

東京市民は、近きも遠きも、この時ならぬ空爆に屋外にとびだして、曇つた雪空に何十丈もしれぬ真黒な煙の柱がむくむくと立ちのぼるのを見上げて、不審の面持だった。――

今でも帆村莊六は、あの「東京要塞」とせんしやう稱していた某大国の秘密砲台の位置発見に大功たいこうをたてた自記地震計のドラムを硝子張りの箱ガラスに入れて、自慢そうに持っている。その黒いドラムの上には、あの特徴のあるとんとんとんとという地響が白い線でもつて美しい震動曲線を描かれてあつた。そしてその下には、

「昭和×年十二月七日、某大国大使館裏にて観測」と説明がうってあつた。そして彼は得々として客に云うのであつた。

「——だから僕はいつも機会あるごとに唱となえていたものですよ。外国の大使館なんてものは、すくなくとも丸の内界かいわい限かぎに置いとくものじゃないとね。あの『東京要塞』の巨砲ですか。あれはマール号が本国から持つてきたんですよ。どうしてと行って、つまりあの忠魂記念塔の中に隠して大使館内に持ちこんだのですよ。全く某大国にも頭脳あたまのいい人がいますよ」

青空文庫情報

底本：「海野十三全集 第5巻 浮かぶ飛行島」三一書房

1989（平成元）年4月15日第1版第1刷発行

初出：「サンデー毎日」毎日新聞社

1938（昭和13）年1月

入力：tatsuki

校正：花田泰治郎

2005年5月6日作成

2009年7月31日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

東京要塞

海野十三

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>